

一 般 演 題 抄 錄

## 15. 間質性膀胱炎の病態と診断・治療について

吉岡伸浩 大西規夫 杉山高秀 栗田孝

近畿大学医学部泌尿器科学教室

間質性膀胱炎は頻尿、夜間頻尿、尿意切迫、膀胱充満時の膀胱部痛等の症状を訴え、一般的な細菌性の膀胱炎とは異なり感染の所見が無い疾患とされている。また原因も自己免疫疾患説、肥満細胞の関与するアレルギー疾患説等、諸説あるものの未だ確定はされていない。性差は女性が男性の約10倍で、好発年齢は40歳～50歳と中年女性に多い疾患といわれている。現時点では、治療法として確立されたものではなく、種々の保存療法や尿路変更などの外科的治療が行われている。検査上、特徴的な所見が膀胱粘膜に生じる glomerulation といわれるイチゴ状の点状出血であり、この膀胱粘膜変化は膀胱に圧力を加えることで生じ確定診断の一つである。同時に圧力を加えることで症状の軽減も得ることができ水圧拡張療法として確立されつつある。今回我々は、当施設において平成2年から12年までの10年間で間質性膀胱炎が疑われた14症例のうち診断を兼ねた治療として水圧拡張療法を行った5例を対象とし、その効果を検討した。年齢は26歳から74歳、平均55.6歳。全例女性。病苦期間は1年から6年。初診より手術

に至るまでの期間は2週間から3年。拡張後の follow 期間は2から5ヶ月であった。水圧拡張術の方法は、腰椎または全身麻酔下で注入用生食の水面を恥骨より80 cmの高さにあわせ膀胱内圧をモニタリングしながら80 cmH<sub>2</sub>Oに設定し10分間維持する。拡張中も膀胱鏡で内部を観察する。全症例に膀胱鏡所見として点状出血を認めた。追加治療なしで症状消失を認めたのは1例、抗アレルギー剤や抗コリン剤、再手術等の追加治療併用で症状軽減を認めたのは3例、様々な追加治療をしたにもかかわらず全く効果なしであったのは1例であった。術前後で比較すると、効果を認めた4例で尿意切迫と膀胱部痛が消失、頻尿と夜間頻尿は半数に減少した。間質性膀胱炎に対して水圧拡張療法は確定診断を行うための手段でもあり、且つ治療を行うことができる簡便で低侵襲な治療法で、今回の結果からも特に疼痛や刺激に対して効果的であるといえる。ただ膀胱容量の拡大、及び排尿回数に対する効果は充分とは言えなかった。

## 16. 陰茎再接着の1例

田中英俊 上田吉生 國方聖司\* 石井徳味\*

人見一彦\*\* 福西健至\*\*\*

近畿大学医学部奈良病院形成外科 \*同泌尿器科 \*\*同神経科 \*\*\*同救命救急科

今回我々はまれな陰茎再接着の1例を経験したので報告した。

**症例** 32歳男性、自分で包丁を用い陰茎切断施行、同日当院救急搬送となる。既往歴には精神分裂病を認めた。搬送後、圧迫止血を行い再接着を勧めるも興奮状態で拒否、次第に出血性ショックとなり、家族の同意のもと、再接着術を施行した。手術はまず尿道粘膜を縫合し、尿道海綿体、陰茎海綿体と順次縫合部より出血の無いよう縫合した。次いで陰茎背動静脈、陰茎背神経を吻合し最後に包皮を縫合した。術後、包皮の一部が壊死に陥ったが、瘢痕治癒した。再接着面で ring contracture が生じたが機能的に問題も無く経過している。また、患者は再接着したことに関して、現在は満足している。

**考察** 過去の報告によると陰茎切断の58%が自己による切断であり、そのほとんどが精神的疾患を有するものであった。その他には妻による切断24%、交通事故11%等の報告があった。本症例における問題

点は informed consent と出血性ショック、手術点数等があげられる。本来手術・検査等は本人同意のもとに施行するものであるが、本症例は精神分裂病の既往があり、切断時興奮状態でなかなか同意が得られなかった点である。しかし神経科医にコンサルトしたところ、精神分裂病等の疾患の場合、精神的に安定すると自傷行為を行ったことを後悔することが多分にあるとのことであった。本症例においても同様であった。また、海綿体は血行が良く、圧迫止血では止血しづらく出血性ショックを招きかねない。そのためネラトンカテーテルの様なものを用いて駆血しないと止血しないことが本症例を経験したことにより判明した。手術点数においては今回のようなまれな陰茎の再接着のような設定が無い場合、切断肢(指)再接着点数に準じて請求した。

**結語** 今回我々は極めてまれな陰茎の再接着を経験したので報告した。今後 reinnervation について長期的な経過観察を行う予定である